特設ページ

子どもたちの感性を刺激して豊かな発想・構想へとつなぐ

聖心女子大学　水島尚喜

授業題材を掲載しているページでは，子どもたちに活動のきっかけを魅力的に示したり，具体的な学びのためのプロセスを例示したりして，各題材において子どもたちの資質や能力が十二分に発揮できるように企図されています。

一方，日文 図画工作では，「題材ページ」とは別に，「特設ページ」が設定されています。特設ページでは，新学習指導要領の目標や内容等における重要なポイントを押さえ，効果的に学びが達成できるように配慮しています。さらには，人間の文化の有り様に焦点化して，子どもたちの感性を刺激し豊かな発想や構想ができるように誌面構成しています。授業等で，これらのページを適宜活用することによって，子どもたちの図画工作科での学びが，より深化することを願っています。

形や色を楽しもう

■背景

子どもたちは，大人以上に世界を感覚的な存在として受け止めています。形や色などから派生する子どもたちの感覚的な世界は，喜びや楽しさに溢れています。本来もちあわせている資質や能力が発揮できることは，子どもにとってとても大切なことです。ところが現代社会においては，感覚の平板化や偏りが問題となっており，いかに子どもたちが本来もちあわせている豊かな感覚の世界を取り戻すかが今日的課題となっています。

感覚的な世界は，感じとった内容をもとにした認知や認識，さらにはイメージを創出する創造の世界へつないでいくために必須です。子どもたちの学びの出発点といってよいでしょう。しかしながら，感じとった内容は，通り過ぎる一過性の存在です。これらの感覚的な世界を楽しみながら，比較したり，類推したりといった造形的思考を重ね，より豊かなイメージの構造を獲得していくことが子どもたちに望まれています。

■〔共通事項〕との関係

今回の改訂では，〔共通事項〕が新しく示されています。〔共通事項〕の事項アは，形や色などの造形要素や知覚に関すること，事項イについては，形や色をもとにしたイメージ作用に関することが示されています。いわば「形や色」という視覚的な世界の仕組みと，内的なイメージ創出という造形文化全般に繋がる両輪が示されています。どちらも不可分に結びついており，表現や鑑賞の両方の領域に共通する基盤的視点です。色や手触りをもとにした感覚的なイメージの把握は，子どもたちの世界認識の方法でもあります。その内容が，今改訂で学習指導要領の中に位置づけられたことは，重要です。

さらに，〔共通事項〕のア，イの事項の前文には『「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して，次の事項を指導する。』と示され，直接の指導内容や評価対象ではないとされています。独立した指導内容ではなく，質的な授業改善や振り返りの指針として，機能することが期待されていると考えてよいでしょう。

日文 図画工作の「形や色を楽しもう」では，色や形などによる楽しい感覚の世界を通して，子どもたちの学びが豊かになるように企図されています。

子どもたちの生活の中には，野菜や果物，衣服や建物，風景など，常に形や色を伴ったものが存在します。そのような何気なく生活の中で目にするものを焦点化し意図的に見ることを通して，形や色のよさや面白さ，美しさなどに気づき，そこから得たイメージを表現や鑑賞の活動に生かすことができるようにしています。

また「形や色を楽しもう」では，子どもたちの発達の段階に応じて，系統化されています。1・2学年では，形や色の認識をテーマに，描画材の種類を含めて構成されています。3・4学年では，形のイメージ，色の性質をテーマにして，言語活動を交えて活動が行えるように企図されています。さらに，5・6学年では，形や色の造形要素と伝統色を扱っています。

ただし，「形や色を楽しもう」は，直接的な〔共通事項〕の説明ページではありません。しかしながら，今に生きる子どもたちに形や色，イメージの世界へのオリエンテーションが大切であるという視点は同根です。子どもたちの資質や能力を育てる指導の方向性をより確かなものにするために役立てて戴きたいと願っています。

新版教科書1・2下P4・5より
描画材の種類による線の形や色の違い，果物を分割することによる形や色の変化，自分のイメージを好きな形や色で表す楽しさを伝えている。

（図1）新版教科書3・4上P4・5より
色のもつイメージを感じて、言語活動を交えながら感覚を深める。

上の4点の写真は，同じ対象物をさつえいしたものである。きょりや見上げる角度を変えてさつえいすることで，さまざまな形を写し出している。
肉眼でも，見る位置を変えると，全体が見えたり，部分だけが見えたり，ゆがんで見えたりして，同じ対象物からでもことなる印象を受けることがある。
自分で写真をとって参考にしたり，自分の印象を大切にしたりして，表現してみよう。

（図2）新版教科書5・6下P4・5より
対象物が，見る角度や距離によりどんな風に見え方が違って見えるかが体験できる。

ぞうけいずかん

■背景

子どもたちは，学校での鑑賞の場面に限らず，日常生活で家などにある身近にあるものや材料に関心を向けていることがあります。「面白いな」「きれいだね」といった言葉や気づきは，美的な驚きや感応する力の表れです。このような子どものもつ資質や能力が，存分に生かされるように，教科書においても配慮することが大切です。

■様々なイメージをもつことで

今回の指導要領改訂においては，教科目標の中に「感性」が表記されるようになりました。いわば「生きる力」の根源力として子どもたちの感性を豊かに育むことが明記されたわけです。「ぞうけいずかん」は多様な図版で構成されています。これらは，子どもたちにとって魅力的で楽しいものが中心で，それらの内容から，自由に様々なイメージをもつことで，そこから発想や構想を広げ，想像する楽しさを体験し，表現への意欲をもてるように企図されています。すなわち子どもたちの感性を刺激する多様で豊かな世界が示されているのです。これらの図版は子どもの造形文化の核として，カタログ的なビジュアルソースとしてイメージ世界を広げるためのものであったり，授業においても参考資料として利用できるものも含まれています。温かい，冷たい，ふわふわ，ざらざら，明るい，楽しいなど，肌や目を通して感じる感覚に訴えたり，表された形や色にはどのような思いが込められているのかも考えさせたりします。低学年の個人の感覚から始まり，中学年で，造形性から身近な社会，地域へと関心が広がり，高学年では，目的性を明確にしたり，広く造形性の違いを認め合うといった発達の流れを押さえた内容となっています。

各学年のテーマ

1・2 上　どんなかんじ	触覚
1・2 下　かたちっておもしろい	視覚
3・4 上　いっしょにあそぼう	郷土玩具
3・4 下　道具を使おう	手と道具の機能
5・6 上　くらしの形，世界の家	風土と造形
5・6 下　伝える形，伝える色	コミュニケーションと造形

新版教科書5・6上
P38・39より
「風土と造形」をテーマに，人々の暮らしを考える。

使ってみよう材料と用具

■背景

人間はつくったり描いたりする欲求を具現化するために，材料や用具を生み出してきました。さらに，表現する内容に相応しい材料を見つけ出し，「手」の延長としての用具によって，より豊かな世界の創出を工夫してきたといえます。その過程において，具体物によって「考える」ことを実践してきました。

子どもたちは世界との直接的な交流も手によって行います。子どもたちは手によって世界とかかわりながら，その成り立ちを知っていくことになります。そして，様々な状況の中から，必要性に応じて，材料や用具を取捨選択し，自分自身を反映する表現を生み出していくことになります。

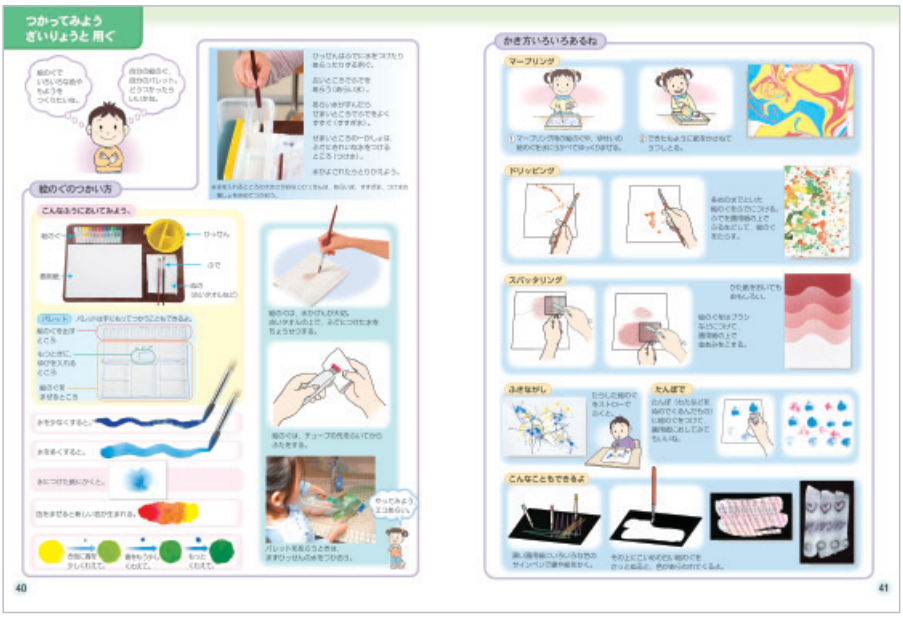
本来,「創造的な技能」は単なる技術・技法ではなく，子ども自らがつくり出していく性格のものです。単に一つの方法を覚えることではなく，外界と手及び材料や用具を通して，世界に働きかけながら，自分自身をつくりかえていく能力です。身体的な感覚的イメージを伴いながらの環境世界との適応過程であるともいえるでしょう。

■子どもの「表したいこと」をサポートするために

「使ってみよう材料と用具」においては，以上を踏まえ，子どもたちの発達の状況に応じて，道具や材料を組織化し指導することに資する内容を豊富に盛り込んでいます。従来より,「材料・用具」の扱い方については掲載されていましたが，日文図画工作では，より内容がボリュームアップしており，新学習指導要領で示された材料や用具を中心に掲載しています。題材ページと関連させ，そこで使われている材料や用具の扱いをわかりやすくイラストや写真で示し，安全・適切な使い方ができるようにしています。題材ページにリンクを貼り，必要に応じて参照できるような体裁になっています。

さらに，冒頭にキャラクターを登場させることによって，自分自身の移し身として，道具等の使用がイメージできるように配慮しています。単なる技法紹介のコーナーではなく，イメージ創出の為の材料・用具・技法の紹介であることを強調したのです。

一方，用具等の使用に際し，事故が起こらないように安全面へ配慮することは，とても大切です。「使ってみよう材料と用具」では，安全指導については，特に⚠マークで示しています。用具の成り立ちや特徴を知り，用具の扱いに慣れることによって，自ずと安全面に注意が向けられるようにすることが肝要と考えたのです。



新版教科書3・4上
P40・41より

教科書編纂に携わって

カリキュラムづくりを意識

鳴門教育大学　山田芳明

図工の授業研究をしていると，新しい材料や用具を見つけて，新しい題材開発に力が入るものです。そのためか教科書を見るときにも，ついつい題材の目新しさばかりに関心が集まります。今回の教科書編集では，題材の楽しさや新しさもさることながら，新しい学習指導要領に即した，低，中，高学年に期待すべき造形活動とは何か，高めたい能力とは何かということについて何度も検討しました。そして，その考えに基づいて，たくさんの題材の中からそれぞれの学年に適した内容の題材を選ぶのに多くの時間を費やしました。教科書づくりはカリキュラムづくりなのだとあらためて実感しました。本教科書を利用してくださる先生方が，担当する学年だけではなく前後の学年の教科書にも目を通されることで，カリキュラムの流れを感じていただければ幸いです。

一筋縄ではいかない作業

東京学芸大学　相田隆司

教科書をつくりあげること。この良質なスタンダードを提示するという仕事は…一筋縄ではいかない。実に実に様々な要件を柔軟に満たしながら…，アイデアとそれにもとづくプログラムの提案を，極めて具体的かつ信頼に足る次元で提示する必要がある。新参者の私が東京・中野の編集会議に参加しつつ，そんなことに気づいたあの日から…幾星霜。いま平成22年春である。この図画工作科の教科書もまた，これを手にする子どもたちのさまざまなイマジネーションを喚起するための“メディア”となって欲しいと思う。そして，彼らが自分の感覚と判断への信頼を築きながら，日々を思慮深く，そして喜び生きるための手だての一つとなって欲しい。

感性を働かせる最強ツール

広島大学　三根和浪

フィンランドで大学や学校の調査をこれまで３回のべ２カ月程度行いました。義務教育世界一と評価の高いこの国と比べてみても，我が国の図画工作科教育は，表現の本質に迫り形や色・材質などと対話する教育として世界トップレベルです。この高い理想を実現する使命をおった教科書を今回共に編集した先生方は，子どもの絵を見てしばしば，「かわいい」と発せられていました。この言葉には，子どもの本当の生が映る表現を見取ることの大切さを教えられます。子どもや子どもの作品に対するこういった眼差しが生んだこの教科書は，教科目標に新たに加わった「感性を働かせながら」を教育現場で実現する最強のツールになること間違いないと思います。

子どもを触発する題材を求めて

東京福祉大学　服部鋼資

今期の教科書作成において最も意を注いだのは，子どもたちに沸き立つような表現意欲を導き出す題材の開発でした。教科書は，一定の期間をおいて改訂され更新されるわけですが，ここには常に題材の不易と流行という課題がともないます。ここで大切にしたことは，この両者を融合し，造形活動の本質を捉えた表現活動とは何かという課題と，子どもの内面を触発し子どもの意欲的で創造的な表現欲求を導き出す題材とは何かという，この二つの課題に応える題材を開発するということでした。ここで願い期待することは，学習を成立させる条件の一つとしての題材がもてる価値と力を精査，検討いただき，この教科書が，「習得」「活用」「探求」の糧として十二分に生かされることを願ってやみません。

「造形の琴線」に触れる題材

畿央大学　西尾正寛

小学校に勤めていた時，6年生の児童全員に「いままでの図工で印象に残っているものはどの授業でしたか」というアンケートをしたところ，3年生で行った，ポリ袋を切り開いてつなぎ直し，送風機等で大きく膨らませる造形遊びの授業（3･4上P10･11「広がれつながれ」）が圧倒的な支持を集めました。この題材の指導者用の授業風景ビデオを教員志望の学生に見せると「子どもたちがあんなに楽しそうに，懸命に活動する授業を自分も将来したい」といいます。子どもが楽しいと感じる活動と指導者が指導しやすい授業とは時に一致しないこともあるかもしれません。一方で子どもが楽しく学ぶ姿を見る時にこそ，教師は指導の甲斐を強く感じるものです。子どもの「造形の琴線」に触れる題材が溢れる教科書をどんどん活用して下さい。

造形活動から確かな学びへつなぐ工夫

兵庫教育大学　福本謹一

新学習指導要領に準拠した教科書の検定結果が発表されたが，各教科が軒並み平均4割以上ページ数を増やす中で図画工作科や美術科はほぼ現行通りである。しかし，今回の教科書は判型を変更した以外に，児童・生徒の学習メディアとして機能する様々な工夫が凝らされている。情景写真を多用した楽しさを強調したものから，造形活動のプロセスを具体的に示したり，表現工夫の手がかりを伝えたりして造形学習を確かなものにするものへと変容している。つまり，児童・生徒にやさしいだけでなく学びの質保証につながる教科書づくりが目指されているのである。〔共通事項〕など内容を資質や能力の観点で整理した学習指導要領の趣旨を生かすには，この優れた学習メディアを十分に使いこなすことが不可欠であろう。

鑑賞対象と子どもをつなぐ一つのモデルに

京都教育大学　石川誠

戦後，H・リードの Education through Art の考えが紹介されて後（のち），「美術を教える」か「美術で教える」かの議論が起きた。これは，学校現場でよく引き合いに出された「教科書を教える」か「教科書で教える」かの教育観と多くが重なる。後者は，概ね「教科書で」を前提とした比喩で，今回改訂の教科書でも鑑賞分野の題材等は，一層その感が強い。取り上げた鑑賞対象は，小学生に是非これをと思う作品等も含むが，身の回りから芸術作品まで，幅広い。教科書の題材は，鑑賞対象と子どもとをつなぐアプローチ方法や取合せの一つのモデルと考えてほしい。

こうした取上げ方を参考に，一方で古今東西の話題作を渉猟（しょうりょう）し，また他方で，学校や地域に馴染みのある対象を題材に発掘していただきたい。教科書をきっかけに，できれば美術館や博物館の実物資料の背後に控える作者と空間・時間を共有する醍醐味を子どもたちと味わってほしいものである。

図画工作の核心にせまる

埼玉大学　高須賀昌志

多くの“よい”作品の創作過程には必ず「創造の秘密」が潜んでいる。創造のすばらしさ，楽しさ，不思議さ。創作体験を通して自らの力で創造のしくみを体得していくことが，表現行為をともなう図画工作の核心ではないか。いいかえれば，子どもたちの創作過程にこそ教科の本質があるといえる。教科書の宿命として創造の結果である「出来映えのよい作品」を数多く掲載する。それは，ともすると「出来映え」が目的化する誤解の原因となる。創るという行為を通じて，なにをもって“よい”とするかを伝えることは極めて難しい。しかしそこに果敢に取り組んでいかなければ教科書の使命は果たせない。

初めて教科書の作成にたずさわってみて，こうした教科の本質がいかなるものであるのかという問いかけを不断に反すうし続けていく必要性を強く感じた。

・・・・・鑑賞する